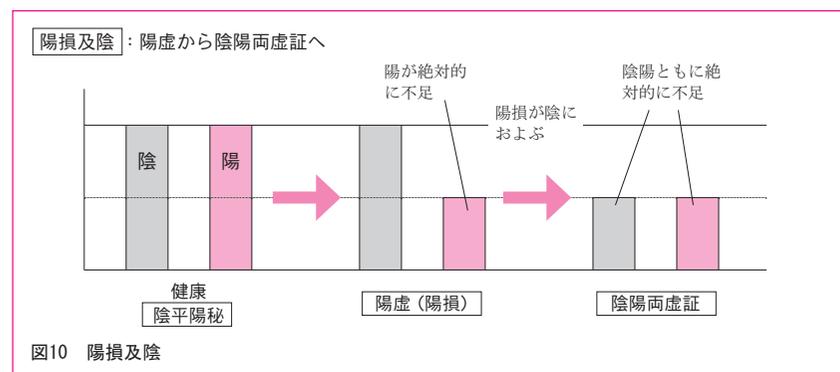


状が現れる。

2 陽損及陰（陽損が陰におよぶ）

陽損及陰とは、陽氣に虚損があるために、陰液の生化が不足することをいう（図10）。陽虚を病態の基礎として生じる陰虚であり、陽虚を主とする陰陽両虚証である。例えば、臨床でよくみかける水腫証は、陽氣不足による気化の失調がもとで水液代謝が障害されて生じるが、病態がさらに進行すると、陽が陰を生じることができなくなり、陰がますます消耗されて、次第に身体が痩せ衰え、烦躁昇火（イライラして顔が熱い）を呈し、著しい場合は痙攣を生じる。



4. 陰陽格拒

陰陽格拒とは、何らかの原因によって陰と陽のいずれか一方が体内で極端に盛んとなり、もう一方を体外に排斥して寄せつけない状態であり、陰陽失調のなかでも特殊な病機である。陰が盛んで陽を体外に排斥する病態を陰盛格陽といい、陽が盛んで陰を体外に排斥する病態を陽盛格陰という。いずれも陰と陽の気のつながりが途絶えて、お互いに拒絶し合う状態である。

陰陽格拒では、陰陽の間のつながりが途絶えるために、真寒仮熱や真熱仮寒など体表に現れた症状と体内の病態が異なる複雑な病態が形成される。

1 陰盛格陽

陰盛格陽とは、陰寒の邪氣が体内で壅盛となり、体外に排斥された陽氣が体表に浮かび上がる状態である。格陽とも称する。病態の本質は陰寒の内盛であるが、現れる症状は、顔が赤い、煩熱、口渴、脈大など体表に排斥された陽によるもの（仮熱の象）が中心である。このように病態の本質が寒でありながら、現れる症状が熱証である場合を真寒仮熱証という。

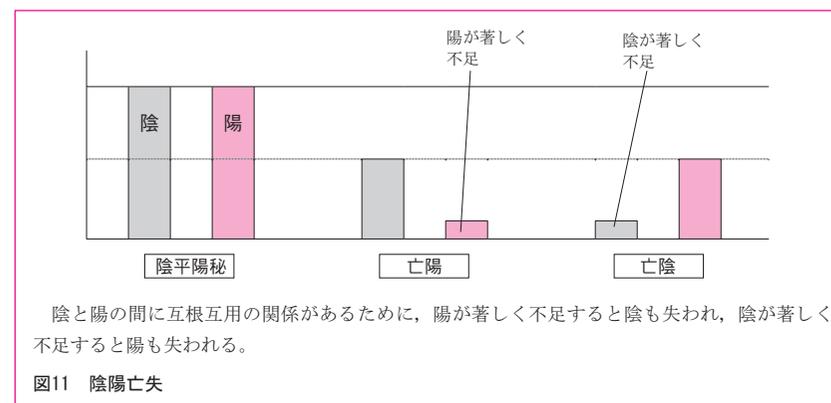
2 陽盛格陰

陽盛格陰とは、邪熱が体内で盛んになって裏に深く入り、陽氣が体内に閉じ込められて体表に出られず、体内で壅盛となった陽氣によって陰が体表に追いやられた状態である。格陰とも称す

る。病態の本質は体内の陽盛であるが、現れる症状は、四肢厥冷（手足が冷たい）、脈沈伏など体表に排斥された陰によるもの（仮寒の象）が中心である。このように病態の本質が熱でありながら、現れる症状が寒証である場合を真熱仮寒証という。

5. 陰陽亡失

陰陽亡失とは、人体の陰液や陽氣が急速にしかも大量に失われて生じる病態であり、生命の維持そのものが困難となる重篤な状態である。失われるものが陰か陽かで、亡陰と亡陽に分類される（図11）。



1 亡陽

亡陽とは、人体の陽氣が突然に抜け去り、全身の生理機能が急速に著しく低下する病態である。多くの場合、邪氣が盛んで正氣が邪氣に対抗できないために生じる。素体陽虚（体質が陽虚）、正氣不足、過労による陽氣の脱失、大出血や慢性疾患による陽氣の損傷などが原因となるが、汗法の誤用による発汗過多により生じることもある。発汗が過ぎれば、陰液とともに陽氣が体外に排泄されるためである。

慢性的な消耗性疾患に伴う亡陽では、陽氣が著しく消耗されて虚陽が体表に浮かぶが、これは陽が弱すぎるために人体から離れて抜け出ようとしている状態である。体内の陰邪が盛んで陽が体表に追いやられる格陽とは病機が異なるので、注意が必要である。

陽氣には体表を守る作用がある。よって陽氣が突然に失われると、ダラダラと大量の汗をかき、体幹や手足が冷たくなり、蜷臥（まるくなって横たわる）、神疲（元気がない）、脈微欲絶などの危険な証候が現れる。『素問』生氣通天論篇に「陽は、体表を防衛して固める」とある。

2 亡陰

亡陰とは、人体の陰液が突然大量に失われ、全身の生理機能が著しく衰弱する病態である。多くの場合、邪熱が著しく盛んであるいは体内に長期間留まって大量の陰液が煮詰められて生じる